

聖書：I ペテロ 2:21-25 (2:21)

主題：キリストの足跡に従う

<序>

本日は新型コロナウイルスの影響の広がる中で、このような形で皆さんとともに礼拝する最後の時となってしまったことを残念に思います。しかし、これまで主の守りがあったことを深く感謝したいと思います。また、皆さんとのこれまでのお交わりを心から感謝いたします。

私たちはいつ、いかなる時であっても主の恵みを忘れてはなりません。この世の状況や人は変わりゆくものですが、主は変わらないお方です。どこまでも誠実な愛をもって私たちを顧み、支えてくださいます。この主を今日、ともに礼拝しましょう。教会堂には集まることが出来ませんが、心を合わせて主に向かって賛美をおささげしたいと思います。

<従順の勧め>

聖書の中心的なメッセージは、イエス・キリストの十字架の死と復活、そしてそのことを信じて受け取ることによって与えられる神の救いすなわち、罪の赦し、永遠のいのちです。イエスは「わたしが道であり、真理であり、いのちなのです。わたしを通してでなければ、だれも父のみもとに行くことはできません。」とおっしゃいました。ですから、私たちは主の歩まれた道のりを、その足跡を一步一步たどどしくではあったとしてもしっかりとたどっていきたいと思うのです。それこそが、神の私たちに対する愛が現されている歩み、私たちの救いの道だからです。イエスの歩まれた道のり、その生涯は、私たちの救いのための事務手続きのように通り過ぎてはならないものです。主イエスの歩みがあったからこそ、私たちの救いがあり、私たちの今があるということを改めて覚えたいと思うのです。

三位一体なる神は、神の子なるイエスによって、このお方を私たちのもとに遣わされ、模範を残してくださいました。私たちがこのお方によって救いを得て、神の御心にかなうものとなるためです。

ペテロの手紙のはじめの部分を読んでいただきたいのですが、ペテロはこの時、迫害を受け、試練や悲しみの中にいた人々に対してこの手紙を書き送りました。彼らが、様々な試練の中にあっても希望を失わないように、これが救いを得た者の生き方なのだと、キリストに従うようにと励ましているのです。

そうです、私たちクリスチャンはキリストの足跡に従うようにと召された者なのです。それは、とても大それたことのようにですが、それがクリスチャンの生き方なのです。

確かに私たちは従順という徳によって救われるということではありません。旧約の時代、神の選びの民とは、イスラエル民族をさしていました。神様は、すべての人を救うために、まずイスラエル民族を選び、彼らを通して、神様の偉大さ、聖さ、愛の深さ、神のみわざの素晴らしさをお示しになったのです。しかし、イスラエルの民は、自分の力で、神様に聞き従い、神様の恵みを受け取り続けることができませんでした。返って彼らはそれを拒んだのです。このような旧約聖書に記された彼らの歴史を通して、人の努力には限界があること、また、人は内側が根本的に変えられない限り、神様の選びの民としてふさわしい生き方をすることが出来ないのだということが明らかにされました。神様は、そのことを明らかにされた上で、救い主イエス様を送ってくださいました。このイエス様を信じる一人一人は、神様のいのちをいただいて内側が新しく生まれ変わり、神様によって神様に選ばれた民としてふさわしい者へと成長させられていきます。

ですから、ペテロは、この手紙の中で、イエス・キリストを信じる一人一人が神に選ばれた種族、王である祭司、聖なる国民、神のものとされた民なのだと記しています(2:9)。そして、この民に神のしもべとして従うように勧め、その模範として主イエスご自身の御姿を示したのです。ペテロは、この手紙の中で当時の奴隷であった人々に語りかけます。その歩みの第一歩は従順でした。従順にへりくだって主人に従うときに、奴隷たちはイエスの足跡に従うことになったのです。私たちも今の世界にあっては当時の奴隷とは全く違う生活を送っています。しかし、今の世にあっては私たちは従順が問われているのです(2:12)。私たちはこの世の中にあるキリストの従順を学ぶのです。

<生ける望みをいただいて>

きょうの聖書箇所は、イエスがお受けになった受難、十字架への歩みを思い出させるみことばです。また、その姿はすでにイザヤ書53章にも示されてきた救い主の姿であることがわかります。

22節にはキリストの聖さが現されていますが、ペテロをして彼には罪がなかった、そしてその口には欺きもないと言います。ペテロは口の欺きでかつてイエスを裏切ってしまった苦い思いがありました。しかし、イエスは違いました。主イエスの十字架には完全な神の聖さが現されたのです。

この手紙を記したペテロは、イエスが捕らえられた後、イエスの仲間であることを知られることを避けました。イエスを知らないと、イエスとの関係を三回も否定するほどでした。しかし、ペテロは陰からイエスの後を追ひ、その裁判の様子を一部始終見ていたのでしょう。後に立ち直った時、ペテロはイエスの姿を思い起こして教会を励ましたのです。一度は信仰のふるいにかけてられたペテロでしたが、イエスの執りなしの祈りと差し伸べられた手によって、立ち直ったのです。今ペテロはイエス・キリストのみ姿を見上げながら、こう勧めるのです。I ペテロ 1:3「神は、ご自分の大きなあわれみのゆえに、イエス・キリストが死者の中からよみがえられたことによって、私たちを新しく生まれさせ、生ける望みを持たせてくださいました。」と。ペテロは、復活のイエスに出会った時、過去の一切が取り扱われ、新しくされ、生ける望みを得たのです。

この「生ける望み」とは何でしょうか。神によって新しく生まれさせられた者が、その生命の源泉を神からいただき、永遠の命を携えて生きる、キリストに支えられた望みのことです。

では、この生ける望みに生きる生涯はどのような生き方なのでしょう。すなわち、キリストを信じ、救われたクリスチャンの生き方がここに示されているのです。ペテロがこの手紙を書いた時代、クリスチャンたちはその信仰のゆえに不当な扱いを受けていました。または、信仰を持っていたとしても賢く生きるためには、その信仰者としての生活を妥協しながら、薄めて生きるという選択肢もあったのかもしれませんが。

この世に生きるクリスチャンの葛藤をペテロは知らない人ではありませんでした。ただ単純に宗教的にこのように生きよと教え勧めているわけでもありません。ペテロ自身がそのように生きることのできなかつた過去を悔い、そこから立ち返らせてくださった主イエスを見つめ、このイエスにあって生きることをここに示しているのです。神の民としての生き方を今日、教えようとしているのです(2:10)。

クリスチャンは世捨て人として生きよと勧められているわけではありません。返って、この世に生きよと命じられているのです。それはまず何よりも、私たちの主イエスご自身がそのように生きてくださったからです。その様子はピリピ人への手紙に詳しく記されているとおりで。ピリピ 2:6-11、ここにペテロが見たイエスの背中が描かれています。

私たちはこれから受難週、イースターと、受難の主の様子をたどっていくことと思いません。そして、それは単に苦しみを受けた愛の人を愛おしむということに終わりません。私たちは旧約聖書、新約聖書のみことばによって、神ご自身のご計画とその意図を知ります。

イザヤは「しかし、彼を砕いて病を負わせることは主のみこころであった」と述べています。なぜなら、「彼が自分のいのちを代償のささげ物とするなら、末永く子孫を見ることができ、主のみこころは彼によって成し遂げられる。」「彼は自分のたましいの激しい苦しみのあとを見て、満足する。わたしの正しいしもべは、その知識によって多くの人を義とし、彼らの咎を負う。」「彼は多くの人を罪を負い、背いた者たちのために、とりなしをする」（イザヤ 53:10-11）と預言しました。この十字架の主のとりなしによって、今私たちは生ける望みを得たのです。

<従順の根拠>

確かに、私たちはこの世にあっては不当な苦しみに会うことがあるかもしれません。信仰の生涯を一貫して最後まで走り続けるということは容易なことではないのかもしれませんが。たびたび私たちは誘惑に会い、また誘惑に負けてしまうことがあるでしょう。主イエスはそのことをもご存知でした。また、この手紙を書いたペテロのそのような弱さを知らない人ではありませんでした。が、ペテロはイエスの姿を目の当たりにしたことによって、また神の聖霊をいただくことによって、それを耐え忍ぶことのできる模範としてのキリストの苦難の意味を教えられたのです。

キリストを信じる者はキリストの「足跡に従うように」「招かれた」人々です。クリスチャンの本領が発揮されるのは、キリストと同じように信仰のゆえに、ののしられ、辱められるような理不尽な扱いを受けたときです。それゆえ、キリストにある者は不当に対して戦う必要はないのです。正しく裁かれる方に任せることができるのです。この苦しみを味わわれたキリストご自身が私たちの弁護者となってくださるのです。イエスは私たちの苦しみを知らないお方ではないのです。

主イエスは「十字架の上で、私たちの罪をその身に負われた」（2:24）。

キリストの十字架の死は、罪人の身代わりの死でした。それによって、かつては「羊のようにさまよっていた」私が、罪を赦され、神に従う者とされたのです。そうであれば、キリストに倣い「罪を離れ、義のために生きる」のは当然ではないか、とペテロは語りかけるのです。イエスが耐え忍ばれた苦しみは、このことによって私たちが神の前に義とされ、罪の奴隷から開放され、神のみこころにかなうものとして新しい命を与えるためでした。

この受難節、私たちは主イエスのみ苦しみに思いを向け、イエスの足跡に従いたいと願います。それは、単に感傷的になってこの時を過ごすということではないでしょう。それは、私たちが罪を離れ、義のために生きる積極的な歩みをするということではないでしょうか。いよいよ、十字架に向かわれるキリストの御姿を覚え、イエスが願っておられる願いを自分の願いとして過ごしたいと思えます。

今日というこの時も、主イエスはわたしたちとともにおられます。今、ともに主のなしてくださった御業とその御姿に心を向けたいと思えます。

<祈り>

受難と復活の御業を成し遂げられた主よ、御名が聖なるものとされますように。

あなたは十字架の歩みによって私たちに模範を残してくださいました。

それは、私が罪を離れ、義のために生きるためです。

キリストの打ち傷のゆえに、私はいやされました。

どうか私にも主の足跡に従う信仰をお与えください。

今や自分のたましいの牧者であり、監督者である方のみ側近くに置いてくださいますことを感謝いたします。

主イエス・キリストの御名によって祈ります。

アーメン。